

不繫舟

中

和書門	類	一八二四一號	函	三架
和書門	類	一八二四一號	函	三架

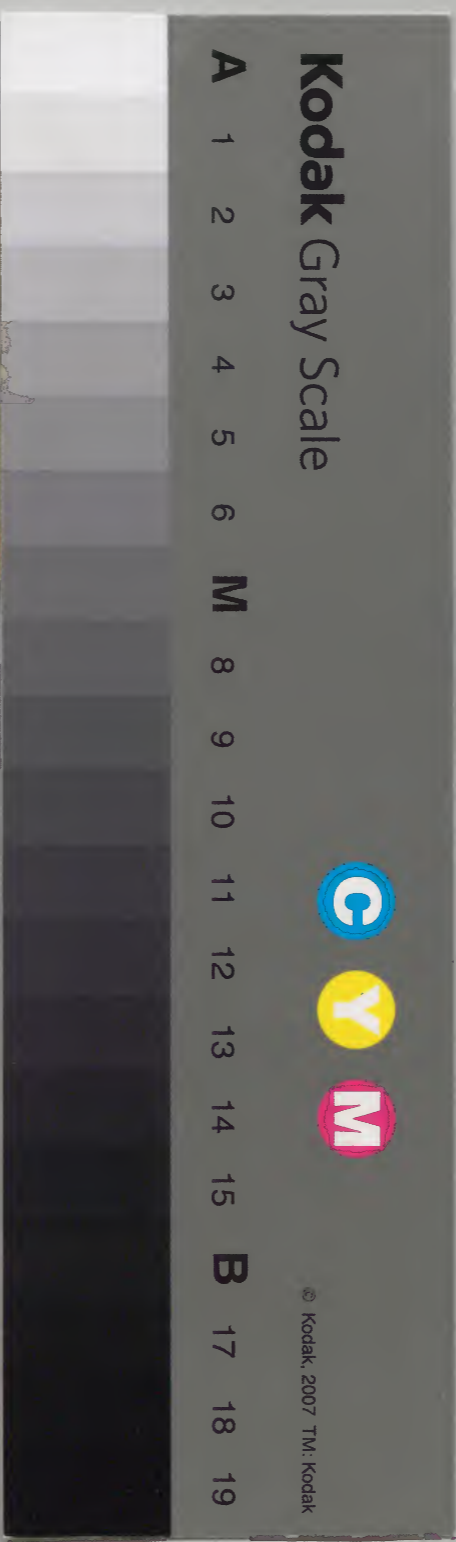
內閣文庫	和書	一八二四一號	函	三架
內閣文庫	和書	一八二四一號	函	三架

內閣文庫	
番號	和 18241
冊數	3 (2)
函號	204 175

番外書

漫筆雜考

新刊納本



て行水よりいひかきりき本をたまたてうられこの免をいさ
急ハ急まひをふくこてむくかへあまきういぢなまゆせ
お葉乃彼よりうらひうる雪れ本におおしうたあふあれ
ふきうひううの言候をあふたあるいされけりてはは
海のは山まけ山をるるうー在原中將乃泣臨ひる昔身
たもひ持資朝臣れたのひげむ時をそまのふある雨の日月
れ夜いつの堤ううせむいつの岸まうつなむじうりま
まぬふえれあわのけはまうるうらう二人三人はぬふわの
舟まきうひてやんをさる舟をさるはちあれけいを
あつれていもみま川はあぬ舟のま身ま都もこせ

たもふとちがれあてういさやうてつなぬ舟のふまことこ
けれあう人あてあてけぬれまうつせよあ所を
いそてんのもみまいんのうつひうそろれまみれ名をま
てうつせみのあ所おほせつるゆえうなりけれ

有竹山房記

竹ハ本草の類ひふして本草かあひ僧ハ君臣れ家より
いそ君臣の制外ありたのれおもふ本草の類ひ竹あると
君臣の家よりいそ僧のあま如かれ僧のこの竹をなぞ
して高節虚心のうちあひたらむいさういさういとこぞ
おげの僧にすれ世々すれこの竹をなと見えやうて

あつげさるるあつげさるるめ侍さるるあつげさるるめ侍さるるあつげさるる
あつげさるるあつげさるるめ侍さるるあつげさるるめ侍さるるあつげさるる
竹を友とすといひてあつげさるるあつげさるるめ侍さるるあつげさるる
かあつげさるるあつげさるるあつげさるるあつげさるるあつげさるる
を後のあつげさるるあつげさるるあつげさるるあつげさるるあつげさるる
中上人 宇津宮 観泉寺 あつげさるるあつげさるるあつげさるるあつげさるる
なごう高節虚心うらあつげさるるあつげさるるあつげさるるあつげさるる
みかあつげさるるあつげさるるあつげさるるあつげさるるあつげさるる
有竹とつけられいあつげさるるあつげさるるあつげさるるあつげさるる
東坡詩 吾軒自有竹 暑月常寒聲 あつげさるるあつげさるるあつげさるるあつげさるる

にも常々涼き風れあつげさるるあつげさるるあつげさるるあつげさるる
あつげさるるあつげさるるあつげさるるあつげさるるあつげさるるあつげさるる
夏の夜れ月清後のみあつげさるるあつげさるるあつげさるるあつげさるる
雨後迎 さ梅道人夏仲昭筆 あつげさるるあつげさるるあつげさるるあつげさるる
風園 あつげさるるあつげさるるあつげさるるあつげさるるあつげさるるあつげさるる
軒端まわつら竹ありあつげさるるあつげさるるあつげさるるあつげさるる
あつげさるるあつげさるるあつげさるるあつげさるるあつげさるるあつげさるる
江戸ふりのあつげさるるあつげさるるあつげさるるあつげさるるあつげさるる
あつげさるるあつげさるるあつげさるるあつげさるるあつげさるるあつげさるる
あつげさるるあつげさるるあつげさるるあつげさるるあつげさるるあつげさるる

小渭川とかたふを贈り今年築地のとてらの桐廬主人の
ためふ何れにあまふとありけり名なき人これ交乃
厚き人そん運々あつたはるおのほほあめ舟のうちにたま
ゆいむとあふせらるるせらるるおのほほあめ舟のうちにたま
しも自有れとあふせらるるせらるるおのほほあめ舟のうちにたま
かたてよとあるはるせらるるおのほほあめ舟のうちにたま
うかほかたてよとあるはるせらるるおのほほあめ舟のうちにたま
いふまはるせらるるおのほほあめ舟のうちにたま
けをめぐりけりあふせらるるおのほほあめ舟のうちにたま
かたてよとあるはるせらるるおのほほあめ舟のうちにたま

まゐる

天保十四年十一月十日

錦洞館記

梅の花はまはひをけりあめ舟のうちにたま
にふらあめ舟のうちにたま
とくあめ舟のうちにたま
梅の花は清き光にそめあめ舟のうちにたま
そあめ舟のうちにたま
あめ舟のうちにたま
ふあめ舟のうちにたま

都鳥此に海より流るるものけらふかくむに聲
 走りけりさふふたれむひんの人をたててるま(ま)か
 ちては久は山のけしきけしをえりて富士の言根に
 あふきてかきりけしおのひを春乃夜よせおひもかけ
 ぬんを時らぬ言りえせむと歌の聖とあむ人の心りて
 夢の中乃人のけても及まへんをたけゆれ山部乃赤人
 宿祿いあやくた(た)る人ちりてけりてけりてあ言
 孫をいよみたり太田道灌入道と母のゆきをいへるあふ
 みてこやひらるるたたくま(ま)の母と(た)る(ま)は
 たりたりとの宿祿のみま月のちらよめれその夜降たり
 といふ言をめてそのあみる所の名を合雪とてればは
 をもたれ杜甫とい(い)る詩乃もどしてはめてた(た)る
 寺主佛よつとつ(つ)ふ(ふ)のひま(ま)あ(あ)ひ(ひ)のせ(せ)ら(ら)して
 その言屋の意ち(ち)つ(つ)る(る)その言(言)あ(あ)ま(ま)の(の)入(入)道(道)の
 の言根を軒端をえりてい(い)る(る)う(う)ら(ら)あ(あ)ひ(ひ)を(を)あ(あ)や(や)ま(ま)の
 雪の意とてむ名つけらるるけりて(て)意(意)を(を)け(け)り(り)て
 又(又)え(え)り(り)て(て)社(社)

天保といふ年の號けりま(ま)を(を)り(り)十年(年)あ(あ)り(り)五年(年)甲辰
 不(不)あ(あ)り(り)る(る)年(年)乃(乃)む(む)月(月)に(に)せ(せ)る(る)言(言)

花月園記

ありともよろき人のもて遊ひくさめてそのふれたの
しきいふも文なりしむよりのたもひさしむるはちか
かたなるむれ人かのみひまの志をたうていふあぬもの
あはれも諸越の聖も博奕といふものあはれやこれせむを
なほやむふまをむむとをりてありて今その碁う
つらなるむむは雲の上あうてなる珊瑚瑪瑙をもて遊
ひむむむをりてこれむをりたきてるもこれ志のたう
とよりひのものとあはれむとす碁げんの十あすり九乃道れ
経緯なるを戦の場みて黒き白き石の三百あすり六十
一も兵士なりこれかきとるの將となりてかたみよむみん
は

はやうて戦の法あすりやある石ひつるをさう入て二四三うち
とらあはれもあはれなるもまきらうてさうなる道よりちはさ
まれゆありあはれはつらあはれとらひつらひは石つらそが
たやすからむ此業あてかてはのたはれむむむもひもひそめ
むむむむむ代をあはれむむむむむむむむむむむむむむむ
る庵幾江戸の一石菴のあり太田ゆむむむむむむむむむむ
むむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
むむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
免むむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
巻ありむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
唐^{カラ}人沈鳳翔^{ビト}贈り詩をえその

庵乃あるやう美め傳く造りありてそ不陳其適の爲
ごををけつりともせしむるの巧あるは外國人も目
を驚くをむしむる也か今歳五月のち江戸よりか
てみよりの寺のかまのふあはほウカラ同族タカトシ克年を文月
はづりふかへり來て其主のよひいで其庵のゆゑよりか記て
まぬせよともむしむる也わつにゆゑの庵をこゝのばれ
あるはつらとひまひつら記されはやくそのあつたし一か
の林まへ入るは思ふすをかまへてゆゑをばのみちらに
かこきぬ一のちまのちまをちまのちまのちまのちま

天保十五年八月の十日あまの二日の夜まらるるつまれ
あつたよもちほきけりさくさくそのあつた岩下はけき
みちりつら

小仙居のゆゑより

浪義のさといあるはこやこゆるあともいふさつり近世か
豊臣大臣の大城をまきたれたるひ所ふて商人のとをば
そ國守ニノカミよりも久らぶげりかまの百千モウチとよみありてちまの
ま金を降こゆる車たてぬまふまらひ川へまヨネ米をば
らば舟とまかづるもよまひそ元世の中け寶の三ミツつ
ははとふつひよりぬとをゆしつ天の下れ寶の國とひつ下
か其市のなふりもあつたつらなむゆやとつひ春

此石屋戸れこまへ種く結とてくらむしたてまつり神樂 カミアソビ
片時よけまうていそなきひをむるこもばなわしかむそれ
あふよみてをしものほむおとどなきもほむけははるか
出居神樂イナヰカケラを沙佐之庭といふいそむ物入えとてつるあや
馬島野にやまを死人まておまおしけ志々信庭のまれ
をけえをとて誰ふとねくされ庭といふさるいそむ
かきとをあそせういとめ侍たしうま

月夜の手を休む

いみとてむさし西をいそける時ひと日浅草寺ふま
うて隅田川原よせうさうして日よやうくく丸虫にあふか

はさをとひてある女のもふ一夜の夢をむすひりて有
くも常なぬ夢の中まにみれたるけもこもくくたけ
乃雲ゆふの雨も初もむさしたの一本とむしたもいあのみ
々もい父のなまを結いともてとく國もか下来ぬれと
あふとくゆかるといふことちとあふむむあふあふい
い月をいそむく物さし廣野はあふもほむめら
ほむえかつきせむやあふむたれもあふもむめら
口けしつれとゆふれ色のめつしれをたありたふむあふ
れつと之形端の松乃志をいそむかみかみか袖をきまぬら
境乃柳れけふいひらうあふむをむあむあふむあふむあふむ

さうしてかくて長居をへきうあひひきてさうこむ春を候う
かきこわしなつくるふ女もえんぬさかみくいと古代ある金
らんの香置るまろぬの橋の枝つけるをさうしていひ
けるはちいぬ母の自ひのたまてまてまうりーちのまうりー
こ縁つゆはあひぬもさうかうぬーよこをたかたをほして
よといひてのちい後まものいひあつぬあぬわんといひ
ちあひさうほけしにひいさうやとこあさきたあこつうい
まの山をこゆとてにやうなあひのほ心ふかあひいぬ路り
かへりてい浦嶋の身のまをそかきちけほかのるをせける
もあひひらさるんあひいさうのさあひいあてまていさういぬ

木々祿十あまういひとふむあひのるをうりー七十三日れ月乃
雲宮あしつる光をまきけまのういぬ。昔のあはれ基乃
はつけあかりさうとありぬたはれまをんやいほまや
うみてあまうりまらみのまけぬぬて火取をけい待つぬかか
けはれりあまけいぬり高砂とらかき志たるをさうらみ
あふあひ野國におほくてこまあうまをれたりにあひいほ
あやいふいさうけま
高砂の尾よまたる松の枝をまけきにはつる秋乃よれ月
とらまひめ侍りしをさうらみ又舞鶴とあるは品と伽羅のたき
ひあしとあまうりてはあはをさうくぢある所まよりていれぬ

かむひ

天よりやつもの毛衣思ふとらるるまじし姫の袖とそおめふ
三は在明とある品と寸門多羅好り然るにまじしは
その品を思はれたるものなり

夜もほららうたたく意の智明の月とひらきいかに
われもはらきとぞおぼしきまほしき四は最上とあるハ羅國
の上れ品あるや

もつ女川の風とて久々の月代がけの糸をかきし家
まふよ計りおもしろき五は老樸とあるをまねりや
あるは年

なつふきの花梅はまねりて先は乃梅堂にほひと好
望にもふ心のひらきやかきおふ月代はけあやこり
さしとれを仲麻呂ぬし三笠乃山といふ一月といふこと未
まの如くむけり思ふる光の意と

たきまてゝ意はさし月をひらきみよとあれ多る
おうちなるめらねてまの火取をよおれ六はあいらつといふ
名をいまくもかこあれと後水尾院乃みよあいらつと
のりしてつけさせたまふとて七は帝より慈眼大師
お賜せられけりかきけりを 隨宜樂院の宮より法眼
まふりし物とせよとれりかきけりてその品はけり免

けりてくらくともたほほしとほひよ、伽羅乃其此品と
法を名物

何たられ名にわらむても雲のうれむし、まはぬ自ひに
と物へまらまをうけし、それハ七又鶴鳩遊とあるむし
乃名をのるありやおほく、品と伽羅乃てに而ひ
うとまかになれおほむきし、東の

夕日ハ木のみれりの、早舟とある、羅園の上れ、
とある、おほし、八又早舟とある、羅園の上れ、
大の川ある、はやた舟の、
を、急ふふ、名、心にく、九又、

品、新伽羅乃た多し、ひ、て、その香と、

君、名を、と、
が、た、
所、あり、

に、は、
ふ、て、
一、て、

る、た、
を、
か、

とろの心のうちれせりけりおもひももいひくるくまのよま
なとたも人も十あまりこのかすそそいふま

月よわんをきてあはれあのかすもあひよこらよひるんを
や口よそしつあはれあを月よまかくぬかす昔のあ
野めはうけあをこまむのたにちちのふいしくなるはなぬ
今よあつせしならむをうけいこむしたましくあはれ
あはれあのかうひくむふいよまのけりしとまの
まのうよいひけり夢をむむふらあはれいひけりや

書車記

車い流せこれ史をけめ物語冊子をふその名あま

又正しくその流せまひりあはれむそのをうけにかかむむた
おもひうたをめのまよみるくらせうしてあはれあはれ
らの名をかりて道の大旨を説く老あるはたの子よ名
けいり 藤光泉 名二子説 なもをりてとそよちのいふ(まね
のねらねらうらるおもひか入(ま)うはあ中の冊子の
との古寺に縁起あふのせし書車といふものもあはれ
けあれと今の世のかさちの引出るあはれいふいふいふ
いひもてはやとらむいふあふ菊洞主のものせらねるあは
書車いしちつげり厨子めくものいふいふてかまむた
形もいぢい女れまいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

にたるとけ主公事のいとはのひましきいめ好く私ちるふ
もかくこやびひのまきとめいみしてはやくびらくけられ
られるを知べうちのいふ副車ヒトメニヒふはらびるに思ひかけ後と
をりくそめちいむふとらふちとてまひる月ほくこころ

松山温泉記

越後國頸城郡松山といふ郷あり松山といふに六十あり
六村をまぐる名を大い山のい溪川よそひて家居せり
その湯本の村と云ふ出湯ありとせふ松山の山の温泉イデユと名む
いふこの湯本の村二百年れむいあけりかきけき出湯の
屋を取建つるそつこやとめいなる坪山のなあり字を湯

本伊兵衛と云人の遠祖可月賞西といふ豊コヤよてその家今いひるまで
此村といふの村長なりとそ四方の山を垣かき谷川南より北よなが
れて凡他所よりむまみふつらむをむつといのほりゆく所にて
大路ハ有ことなり出湯の屋ハ三間餘又五間斗之旅人やす
家私多屋をけめ七八軒けりを録家居倉庫ふとあり
て薬師堂ハ西南の山よそひて北東の方をみまうたるさま
もうきせのちりちいはあしてちる仙人のすみなりをいふ
村の有かりなり出湯の屋れうち湯槽二懸樋とまひ二まで
なむ流れる一を熱の湯といふことを疝瘻といふ病よまうりく
今一を冷の湯といふこころの瘡のたをいふいふなりと

それのしその湯を試るまじつは志ははゆるてむし人乃
つちのそは潮脈あり火脈ありその潮脈と火脈とあひあふ
ふよりいつは志不はゆるといふ如くはる一せよいとゆる塩湯
みて冷の湯といふ方ふのこ湯花といふものちり来るをみれ
同きうりよわきいつともその本性異あるを知らしそのたふれ
病くしの瘡よりいふといふいふあむ九天下れ出湯のある
恥をなひみるよ山ふそひ谷川よつきて湧つれをさる山人の
手ふ瘡つき足り瘡の出たるなとをいやは一里人の常
に薬をもちあつたきひユヤニ浴をかるとあて多々おめ心をや
なふまそあるべきさいへと湯の塩を加へて浴ユヤふふ験あり

まて此出湯の志ははゆるはやく香川あふりか九温泉
味鹹者よりといひりりかあひて必その功能ある一山人の
すなほなるひららよは湯をたのみをそれ熱種は福より
もてか子をつらぬきとめ或は志ぶみたきひ此またりにて
おさなと云むつあまかつそよひひくたくなるは家よとて
かり蓄タカヒたまてなむ新あむむ取て湯を煮て洗ふいそ
はるあとなむ是は湯の大旨なり鶏はめてたまこあり火
れかけくらゝ旅人の夢らちよほのまら出湯の屋の内はれ
かしきなふいさいとまき人のとく入あつて窓の外はみゆき
て大聲まひいのもる大方人の湯漕みちこてるたふ

なるくや、物のおもひ、後より、皇の朝、代つまふ、消のりかけ
ひの水、れき、いさ、ゆる、夜の雨を、望らじ、よも、静を、し、を、あ、り
と、の、お、山、人、の、お、ち、ち、し、く、妙、山、の、名、お、ふ、松、の、よ、り、ひ、乃、千、年
も、あ、く、に、し、ま、く、師、久、直、也、拜

天保十三年十月

玉筭記

い、て、ま、く、も、か、と、あ、ん、と、東、照、宮、乃、あ、つ、ま、の、大、城、ふ、
て、天、の、下、れ、大、凶、改、を、ヤ、あ、る、あ、と、に、あ、り、に、し、ま、と、こ、れ、
吹、風、お、ひ、ぬ、ま、も、あ、く、新、水、の、滞、り、も、あ、く、世、八、十、
三、百、年、ハ、三、百、年、あ、る、ま、る、く、あ、く、あ、の、中、治、り、
大、城、の、所、あ、た、り、を、げ、め、國、郡、月、お、に、き、り、ひ、日、お、ま、る、受、行、
て、い、ま、一、へ、も、あ、り、あ、く、近、世、あ、た、ま、ひ、な、く、が、ま、と、に
た、ん、を、お、の、つ、ら、ん、の、心、お、ら、う、に、お、ら、う、て、け、う、な、ま、い、あ、ま、い、人、も、よ
き、い、ぬ、を、ま、い、う、ま、ま、あ、け、り、海、で、富、さ、る、ゆ、家、作、の、ハ、な、ま、
ら、て、ま、る、く、が、む、今、乃、大、將、軍、家、世、志、あ、り、め、て、ま、り、
ら、い、う、ろ、ろ、ひ、あ、り、な、ら、ひ、を、改、め、治、む、と、て、新、ら、ま、き、大、凶、改、
を、ほ、も、ら、う、治、む、な、れ、を、國、の、司、准、ら、う、を、傳、へ、ひ、も、あ、ら、む
志、の、あ、る、中、あ、も、水、戸、中、納、言、の、君、ハ、し、ら、ま、あ、つ、き、明、き、清、き、
心、ま、て、天、の、下、れ、賢、君、よ、お、と、ま、れ、ま、ま、ら、う、と、う、よ、ま、ま、を、ま、ら
せ、あ、く、常、陸、國、よ、下、ら、を、治、む、に、國、内、を、け、ら、ひ、治、め、治、め、心

大城の所あたりをげめ國郡月おにきりひ日おまると受行
ていま一へもありあく近世あたまひなくがまとに
たんをおのつらんの心おらうにおらうてけうなまいあまい人もよ
きいぬをまいうままあけり海で富さるゆ家作のハなま
らてまるとがむ今乃大將軍家世志ありめてまり
らいろろひありならひを改め治むとて新らまき大凶改
をほもらう治むなれを國の司准らうを傳へひもあらむ
志のある中あも水戸中納言の君ハしらまあつき明き清き
心まて天の下れ賢君よおとまれままらうとうよままをまら
せあく常陸國よ下らを治むに國內をけらひ治め治め心

けしつへとおろちありとそにのし去年の志を次られ東の大
城のこもとふりして今年む月れ九日初子せりふ山田
公箱清興の松れ下りけむしひよふあふれ海玉つきある箒め
くちのをとりていそんはかこくをすれ人はい見すア
こハ常陸國のさる草めて中納言の君より華頂乃宮り
まぬせ給へるもやそ何りよん給へるものとあふり古人
の歌は初ぬのさふれ玉箒とよめるものや今一東大さふ
侍人うりといかたをみるよ今一造りもの之是あじ古れ玉箒
さるあふあひやといかかさあふよとて造り給の出り
あむもきりたあを教へられけりありれ此世もあふりて

中納言君のそれ國內みもかろめ侍たきそのたあらをいん
出さそ給ひたるといハ 天神 國神の大造心もか多ひたを
さるけりたそそのは心の高きをさあふけを國れみけはあふ
この一季目よるさるたふとくさふさるりてかこくあ給

天保十四年癸卯正月

雜著

長歌正格

なつ歌よみし歌よこも人あふこと古事ふみや方とあしにえ
ひよもえんせり葉集をけめねるさる此集あといと
あふさい世のあふりていねを今れ世のいさくさひす人

夕日うつろひ登る道もさふり侍もくちくち志のど
おろり千代といふいふあそびにわづらひ侍もくちくち
あまのたふさそあくき金にけ嵐にけよあなけい
神を月いふとよれきてまついふあそびにわづらひ侍
もよる消息してはききたるあつがくまこめ侍
岩さけ皮たたくまひさけ精進のをくくちくち
柳桑をよの末とい侍もあそびにわづらひ侍

雨中詞

日本紀の山局のちのちあそびにわづらひ侍
さゆいよの夜に月おにわづらひ侍
あそびにわづらひ侍
いとそが一孝の庵に君がさのほとまていふあそびにわづらひ侍
あつ風ふまほし梅の花れあそびにわづらひ侍
その雨いふとよあつらうたる夜齊信タツシの中將ふこあそびにわづらひ侍
えあつりわづらひ侍
ほつはえゆかたのんがしひの世はまじしあそびにわづらひ侍
いと好むと高局よほしあそびにわづらひ侍
あそびにわづらひ侍
あそびにわづらひ侍
あそびにわづらひ侍

牛よひついで善光寺まあり

むうこの信濃國小縣郡か心をなすたうかあつたふ日
軒端の布をけらうかふりつこよりの牛ひとついで来てその
角の布を引きてゆきたりおうねいけけらだちてにくき
ものなまの布をぬきみておめかすなまのついでてそれ牛を
おひひけてゆくか牛もらうあつてつひにこれ善光寺の金堂
ふそまなりたる日に入ける牛かまけすやうかえひかありぬ
けれも佛の光明はきれうの如くあてかの牛れよまもやそ
文字のやうふそえとさるそのりなまひん

うーとのこおひはふちそよの道なれをもちひくたのうんを
やあひあるなるはるか忍菩提の心をたうてその夜よ一夜

佛のこまへは名とあつてあつてかの布のゆくかおるふか
家をかへりてとありて夜のともたなまきうしてそのやうに観音の
ままとすわりなまにの布はゆるなまそのばもれらるやふ
たしあるやうにいあく善光寺の僧を信してめ侍りま往生
かよげしとあひそのばもらひ今ふ布引の観音とておとす
かすりこれをしせま牛ひひりて善光寺まぬりよかひり侍
へふたしそ

花乃あほひ

あまふんすまうほうくもあらん文をかよかまえ
かひきい女のありあるふと花のよほひとあつて

はらねんあから男のかけも及ふや一花の花けなほしの
けふも終る如くあそあせまともや女を心あるとよめ侍
たらむよいつち一をうきうの葉ありがやもこのみそ
道志あむむ人のこのまじひのつちあらすうぶとくおまふ
あうらさいたふ本ははああぬまをうけまつけて
腰をぬけしけゆあをよふひ出てたれしをけるも
ちいさなふ人もるゆあむのをやうこのまじひを
あうついつちああ一はあ意のうちあけやうてえあ
ぬ香のまほひあまのつちあむあむあむあむあむあむ
こころうらやうこころあむあむあむあむあむあむあむ

いろふうてあむこころあむあむあむあむあむあむあむ
あむあむあむあむあむあむあむあむあむあむあむあむ

あむあむあむあむあむあむあむあむあむあむあむあむ
あむあむあむあむあむあむあむあむあむあむあむあむ

あむあむあむあむあむあむあむあむあむあむあむあむ
あむあむあむあむあむあむあむあむあむあむあむあむ

浅草海苔

今一太森れごとをいもまて品川のまきわりの海又いつち
世不浅草海苔といふに浅草のまきよりおんやけのまき
よにもいれまははまのまきよあむあむあむあむあむあむ

たつる人もあまを今の人もあまのめしつゝあまのれはるすしな
葉はみふふらひ乃たきしむこ枝

今一女

今一女ありたりある男けめてそのりふふやとりたりり
ふりく人志をすうふれを女ふの男のあるやうに
は姫君の物語のをちくとしひるを男と見かすたつて

初流川を渡りて

初流川を渡りてかひありてこひを君と信のはれ流
となじあそびつるげその後いきふたは軒のなれはれぬ
りふふあふぬとあまけ山舟たきさるやあまはほくに

今一女

初流川を渡りてかひありてこひを君と信のはれ流
となじあそびつるげその後いきふたは軒のなれはれぬ
りふふあふぬとあまけ山舟たきさるやあまはほくに

住の江れまてふ君とあまのけはるきさあなをひあま

今一女

今一女ありたりある男けめてそのりふふやとりたりり
ふりく人志をすうふれを女ふの男のあるやうに
は姫君の物語のをちくとしひるを男と見かすたつて

今一女

このかたは父母の命をうけついでりしが、このまゝしてまゝ、
子れかたをまゝうたひ目ふるやう人はなまのふりなま
ふりもあつぬと口はひりきりしやうやうおもふをいふあつむ
そいふもこそまじあつむのまゝをまじれとみりつたもあつ
あつむすゝとこそおほゆせ

碑文

居醒泉碑

あつま路り名あつた泉三ありそのこといふ近江國阪田郡
醒井泉美濃國當藝郡養老泉同國不破郡垂井泉
これありそのまじを試みる人のいひまゝ養老ハ醒井ままけり

垂井ハまゝ養老ハまゝけりといふかたはこれ垂井泉
東路の泉は祖といふへおのれは垂井泉をわむるまゝ
古史ハ日本武尊の尾張國より膽吹山の神をむなまゝり
とてむと出たまひし時その神れいひまゝあつむとひり
くまゝて山下の玉倉部のまゝをむすひるまゝ居醒た
まひまゝいふまゝかひし膽吹山おほまゝかゝり尾張國
かへりぬりし路次まゝり古歌ハ東路の居醒のまゝりま
おもふ山のまゝ先佐と不破郡名をいひしやうをまゝあ
とせて東路の不破の中山まゝりま名まゝ居醒泉がま
とひちまゝり醒井と延喜のまゝ早のまゝ時仲算大真

のりせりよりちのふをせり養老ハ靈龜三年ハ老と
るゆとて大治世の号を改させぬ言ありこの垂井と日
本武尊の居醒泉ありかれを世のあらはるも養老を醒井
よりふく垂井とまゝに昔先よりいふやちを是を
こそ天下の泉ハ始祖よりたへん此志の玉倉部
ふあしを上せよ、先れをち玉倉部の泉といひ日本武尊の
おきめ玉いしより居醒泉といふ名のこちく改してやとて
そのさとを居醒里とよしてし中世よりこちより垂井の
泉といふ志する水のまかちてしひまのむを後ついで
里の名ふおはせ川にたふす

あつも路のるもめまのつ道せより檜下か人垂井とふ
名よちのしむいそみりとのほちをいけてかつりみ
まの勝吹山ありする神の神ハぬのあは蛇のあは
けのまよひまのむやちをけさのまは心のみやん
まのまよひまのむやちをけさのまは心のみやん

天保八年丁酉十月

中洲吊古文

おみ水西南よりいて、東ををけ、北をおむくを千隈川と
いひ多ちる西より東をけ、まろく千隈川をおちあへるを
犀川といふ二つの川の中嶋ハ昔よりいふ川中嶋とて甲

斐國主武田晴信越後國主上杉輝虎と多かひり地也
此信濃國の葛尾城主村上義清より甲斐人此ためふその
志る所を失ひ越人のまらうとくあふれをそのむいせむ
としてよりその戦ひいかりなる時天文十五年晴信信濃國
をおはせてその名天の下まきことこり輝虎年十八よりこれ
あかきことあむむこをうけひきてまの年十六年十月
義清を先手よてけめて甲斐人この國海野平またかひ
りまかりよまらふある雨宮たむろり一年あふそ
原の町まゆみ天文廿三年千隈川弘治二年戸隠原弘治三年あふそひて
あふそ年月を經勝負かみあふそいふらあふそ

戸隠原の命をうけりむのこふそありなる永祿三年
尾張人のくまきたむらふさもたけり駿河人も桶間
の霧ときまぬ戦のけをまきいつの世の時まふむそれ
四年の八月越後人の勢ハ龍よふ神のけま如く東の山路をこ
こ甲斐のかこもあふそ危饒海津の二れ城をここて西條
山まわりせるとい虎の穴ま入りて虎の出るをすつとあふめ
甲斐の國主ハ虎より神の勢ひありて南の山あひより西のわ
有旅の山まいふそを越人酒まられそそれいそを称
まらひまぬかほつりハ甲斐人こにあふそ五日海津乃
城まぬ虎ハ龍をけり龍ハ席をけり甲斐人そのいそ城

二つはもつち其一ハ龍の尾をうちまひ一つハ龍の半千隈川を
わさるをもちてその頭をむくこととす越人その尾をうくこと
をさるは千隈川と後中島ありたちに席とのまんとす甲斐人もまひ中
嶋よりだ九月九日の曉雲もあやけはゆるとあひはあや
ことけりもあひ車かこふかりて箕のまよさうぬ越人龍乃
ごとけりて席をおとひ甲斐人席のごとたかひて龍はむふ
く越の海をさうてかへりぬ甲斐人大聲をあげてかちわが
すといへもそのいろと左馬助信繁その家臣豊後守西角
昌清山本晴幸初麻忠重らみお給のためおその身を失へり
そのけりぬ海野平かあひりよりあまひりて十五年甲斐

人その家臣を失へりこと一万人越人その家臣を失へりこと
六千人ありぬあまひり母今ふりて九月十日雲南北か
かへりあふ東西をさるはといふ甲斐國主ハ新羅三郎より
二十七世孫あり世々その國郡をうけばき晴信よりて信
濃國をあいせそのいさほひ関の東におひりそのたといひ法あり
其謀よめつねにあひて天の下れをあふるといへも此戦り
いりて計を失へり越後國主ハ關東管領上杉の家臣あり
父長尾為三郎といりて其國の主とあり輝席も北國半ハ
あまにぬつひよ上杉氏をたへりて關東の管領ハあひりり
いへも席の穴に入て身をむかへりてかへり甲斐國主駿河

比丘筆をくもふともんは信ら信らまふふらよる信となふ
まことまほまいたのいあかかる文布てうしつりまを弱
女を得てまほねふ名簿あてまつらせまほまほまほまほ

天保三年十二月けつう二日

荅人問碑文

碑文その事れは志よりをいつてあせるあり鈴屋松屋のま
せる是也又その事れは志よりをいつて後々短歌すま
旋頭すまし又その心をのめるあり芳宜園徹綿齊のま
是ありその事れをいつてあせる古文をまねして異國を思ひ
かけぬひとつのまほまほまほまほまほまほまほまほまほ

せるハ漢文をまねかひて巧ふあせまほまほまほまほまほ
まほまほのまほの碑文の體いつれもこのまほまほまほまほ
文體明辨ふも其序則傳其文則銘此碑之體也又碑之體
主於叙事とまほまほまほまほまほまほまほまほまほ
しつりてそのまほまほまほまほ主於叙事とまほまほまほ
ひてけれまほまほまほまほまほまほまほまほまほまほ
まほまほまほまほまほまほまほまほまほまほまほまほ

六月十日あより友あちのまほまほ

例のまほまほまほまほまほまほまほまほまほまほまほ
まほまほまほまほまほまほまほまほまほまほまほまほ

補録

馬求樓記 エシゲロウ

山は其の末を名おひしるのみをばさうぬ久遠根
 ねもいと多のるをいふふしちいやう神代より一て
 少名名神れおひしるら存所なしをなる一 露籠山ハ オカニ
 雨をあげし龍神れをみるこそあらぬ海ちた山なしは
 ちあけあかか志天つ水降りての世人のいふことぬ説小 トキコト
 かんむりあき近昔れ城の説を誰や一人うまひれ
 あり米山川ま久石川ともいふ今乃ひどのさあめ
 にまらせあむもやうあふ一の言屋よひむしなる神明宮

よらあうてまらうまらうて長ハ十丈ハうり圍ハ三丈ハあれ
ること此社の事と人きり古よりその一つをわうたまる
とふとねいふれまらうの人とあ神代本といひつゝいふ
がむ此本今より十年はくさたわあまらう雪のうめに
枝の折たりしうあのかげはち風巻れ前大宮司延好翁の
ちほくもいふをいひ火取^{ユカ}にそのかたういふとせし
たまはやくて又ふと名つげてめまらう久にまらうぬまらう
この社今ハ白山社とて寛元三年八月に棟札より建立より
百九十二年をいふとあれを八百年あまらうけうに社と
いふと程よるぬまらう神代の時よりまらういふとせし

此社とそねはゆるこの杉より一せれたるのなら飛く
かたうまらう材なるは南ハあまらうゆ一まらうたまらうあまらう
いなる一ハ人とのまらうたまらうまらうまらうまらうまらう
幸とて神代本とならんつまらうまらうまらうまらう
一らあめつらまらうあまらうまらうまらう風巻山の杉れむ
るやうまらう

竹雪園記

まら雪のうらみあまらうまらうまらうまらうまらうまらう
あまらう心れひまらう直江に浦々左衛門尉真行^{サネユキ}といふ
人のまみ一所ありまらうまらう竹の雪となまらうまらう

あまの身の舞を寛文といふころ沖つなごころは
濱村にけける長戸山の上人の竹れ雪をめてその寺
をうらぐうけついでさむい人のその名成おきて其
寺とあつたをさし上人といふ大谷れもつみだも
にうらむやむもなま唯善上人れなむいし
るふとまかひにかな利なりをれ法乃其後あつて東で
今れ唯観上人まをせあすり四つまになむま
きりくみの竹れ雪といふたがいの直江左衛門尉
其行より人同一物なり長松のなまが女乃
はけふ月若といふ事ありてなむた親をま母れ

きりぬたふとて冬れありのいと寒れよその
竹の雪をけらるせあせりばつひはけれなむ
より父の世をうらむのにおもひなうてその歌を寺と
してさぬとがうついで越後名譽志といふ書は
そのあまの寺の北にありとあるとて猿樂の
うらむのあまのをうらむはるるけきより母の中
にきくまのあまの今このれそのあまのひけき
うらむかうれさむかむさむたにさむい
もけりろけなむいあまのけけはてあまの上人
学れ才かうおはして舊き跡とていふれ

